

## 編集後記

劉建輝 (国際日本文化研究センター)

本報告集は、2006年10月17日～20日、国際日本文化研究センターにおいて行われた第29回国際研究集会「前近代における東アジア三国の文化交流と表象—朝鮮通信使と燕行使を中心に—」で発表された諸報告をもとに編集したものである。研究集会には日中韓三国から50数名の研究者が参加し、内公開講演者を含め29名が研究発表を行ったが、発表者等の事情により、本報告集にはその一部を割愛し、計24本の論文（一部は集会発表時のレジュメ）を収録した。これらの研究成果の多くはいずれも日文研共同研究「前近代における東アジア三国の文化交流と表象」（代表崔博光・18年度）と関連を持つため、本報告集はまたその一年間にわたる共同研究の総括を兼ねた性格を有するものと認められる。

共同研究会、国際集会の開催にあたって、われわれは「朝鮮通信使や燕行使は、約250年にわたって日本と中国に派遣されており、彼らが残した記録は膨大な量にのぼる。のみならず、日本と中国側の資料も相当の量に達していると思われる。しかし、これらの資料は各地に散在しており、総合的な整理作業が緊急を要している。これらの資料には詩文学・儒学・仏教・絵画・漢方医学・本草学・西学・自然科学・幾何学・交易・大衆文化などと、人や物の交流をめぐる事象がたくさん盛り込まれている。これらを総合的にまとめ、学際的な観点から事象と人物に同時に照明をあてることによって、三国間の文化的・文明的交流やそれぞれのアイデンティティ形成問題等をより明確にすることが出来よう。従来、東アジアの前近代を閉鎖的な鎖国の時代とみなした研究者が多かった。しかし、この地域では東アジアの文明圏ともいえる高度の文明と国際化が三国の間には勿論、西欧世界に対しても成立していた」（崔博光）との趣旨を掲げ、できるかぎり従来の一国中心、または二国間交流の認識布置を打破し、日中双方に使節を送り続けていた韓国の発信者、転信者としての役割とそのもたらしたさまざまな文化的リアクションを浮彫りにしようとした。

一読してお分かり頂けるように、そうした目論見が共同研究会、また国際集会を通しておおむね達せられたと思われるが、歴史的にきわめて複雑な経緯を持つ通信使、燕行使のすべてについてむろん全部考察できたとは言えない。そして個々の論考においてもまだまだ未解決の問題を多々孕んでいるのも事実だろう。ただ従来の枠組みを超え、東アジア全体を俯瞰する巨視的な視野のもとで一連の問題に真摯に取り組み、その一部を整理、解明したことはやはりいささか自負できるのではないだろうか。願わくは、読者諸氏の厳しいご批判と温かいご理解を頂ければと思う次第である。

最後に、編者として、研究会主催者の崔博光先生、報告集執筆者の諸先生方、また共同研究会、国際集会に参加し、発表までして下さったにもかかわらず、諸般の事情により本報告集にはご論文を掲載できなかった諸先生方にあわせて感謝の意を表したい。所外セッションで相国寺を見学し、所蔵の通信使関連資料を共に閲覧した時の興奮を今も忘れられず、大変素晴らしい思い出となっている。